

「経験論と心の哲学」における一人称権威の成立について

過能 洋平

はじめに

本稿が扱う問いは、セラーズの「経験論と心の哲学」（以下 EPM と省略する）において一人称権威はどのようにして成立するのか、また、心的状態への特権的アクセスは如何にして成立するのか、という問いである。

セラーズは EPM において思考を理論的実体と類似のものであり、それは知的な行為の原因だと述べている。しかしその中で「われわれの各々が自分自身に対して特権的なアクセスを持つという意味での私秘性」¹について、そして「各人が自分自身の思考について持っている特権的な接近方法」²についてほとんど述べていない。彼は、主体が持つ自身の思考などの心的なものへの特権的アクセス（接近方法）の概念を獲得する過程を 59 節で示している。しかし、その内容は不明瞭である。また、「思考の出来事は理論的措定物のようなものではあり得ない、というのもそれがどんなに観察できなくとも、理論的実体へのアクセスは存在しないからである」³というのが、セラーズの議論に向けられる批判の一つである。

一人称権威の成立からセラーズの心の哲学を解釈する試みはなされておらず、新たな解釈を提示する余地がある。

1 節では金杉による整理をもとに一人称的権威について一般的な特徴づけを行なう。2 節では EPM の議論に入る。2.1 では EPM における議論（ジョーンズの神話の筋）を概観し、ブランドムとドフリースらの解釈を検討する。2.2 と 2.3 では John Bishop の解釈を検討する。最初ビショップは EPM での議論に対し否定的な評価を下す。次に彼のより積極的な解釈を検討する。3 節ではビショップの解釈をもとに EPM の枠組みにおいて特権的アクセスが成立する解釈を示す。

1 一人称権威の特徴づけ

本節では簡単に一人称権威の一般的な特徴づけを確認する。そして主体がどのような要素を有していれば、その主体が一人称権威を持つといえるのかを見る。

一人称権威が問題となるのは自己知の特殊性を明らかにする文脈においてである。自己知とは、「自分がどのような心的状態にあるか」⁴、つまり自分が今何を考えているのか、

¹ Sellars, 1997, p.87

² ibid., p.107

³ Bishop, 1980, p.227 これはビショップ自身による批判だと思われる。

⁴ 金杉, 2014, p.167

何を感じているのか、ある事柄についてどう考えているのか、などといったことについての知識である。こうした自己知には一人称権威が備わっているとされる。

一人称権威とは「主体がどのような心的状態にあるかは主体自身が最もよく知っている」⁵ということである

こう言えるのは自己知には直接性が備わっているためだと考えられるからである。直接性とは、自分の心的状態についての知識を形成するために「自分の行動の観察に基づいて自分の心的状態を推論する「自己解釈」を行う必要はない」ということである。⁶例えば、他者に思考を帰属する場合、ある人がラーメン屋に入るのを観察し、「彼はラーメン屋に行けばラーメンを食べることができ、人がラーメン屋に行くのはラーメンを食べたいからだ」というような推論を介することで、「彼はいま [ラーメンを食べたい] と考えている」という思考を帰属する。また私はその人に尋ねなければ、その人が昼飯に何を食べようと考えているのか知ることはできない。他方で自己知の場合、私は自分の行動を観察することなく直接的に「私はいま [ラーメンを食べに行く] と考えている」ことを知っている。また「昼飯、何食いに行く？」と尋ねられたとき、同様に私は「ラーメンを食べに行くよ」と自分の考えを表明する。いずれも私は自分の行動を観察したりそれを解釈したりせずに私自身の思考を自己帰属している。このように直接的、つまり行動の観察や解釈などを介さずに形成される自己知は、観察や解釈などを介する他已知よりも確実だと考えられる。直接的に形成される自己知が、間接的に形成される他已知よりも確実であることには二つの側面がある。

不可謬性：どの自己帰属信念にも誤りがない⁷

網羅性：自己帰属信念がどの心的状態についても漏れなく形成される⁸

例えば、私が「昼食にラーメンを食べたい」という信念を直接的に形成するならば、私はこの信念を実際に持っていると考えられる。このようにどの自己知についても誤りがないという特徴が、不可謬性である。また、私が「昼食にラーメンを食べたい」と考えているときには、私は問われれば自分がこうした考えを持っているという自己知を直接的に形成できると考えられる。このように思考がどの心的状態についてももれなく形成されることが網羅性である。そして、「直接的に形成される自己帰属信念にだけ以上のような不可謬性と網羅性があるということが、直接的な自己認知に他者認知にはない確実性があるとい

⁵ibid., p.167

⁶ibid., p.171

⁷ibid., p.172

⁸ibid., p.172

うことの内実である」。⁹ただしこの二つは完全なものでなく、概ねのもので良い。「自己知の一人称権威にとって本質的なのは、他者認知よりも確実性に関して劣ることは概ねないということ、つまり、自己認知と他者認知の確実性の間に非対称性があるということなのである」¹⁰。こうした自己知に対して、他己知は言動の観察と解釈、推論などを介している。そのため他己知には直接性や確実性が成立しない。

本節でセラーズの議論のうちに見出したい一人称権威、その直接性と確実性を確認した。主体が自分の心的状態に対して直接性を有していれば、心的状態に対する確実性をも有すると言うことができる。これら二つを有するために自己知と他己知との間には非対称性が生じる。この非対称性があることが一人称権威の本質である。次節ではセラーズが、どのようにして一人称権威が成立すると論じているのかを考察する。

2. EPMにおける一人称権威

本節では、セラーズが EPM において自己知の直接性についてどのような議論を展開しているか、それに対してどのような解釈がなされているかを検討する。2.1 では EPM の議論を概観し、それに対するブランダムとドフリースらの解釈を検討する。2.2 と 2.3 ではビショップの解釈と主張を検討する。

2.1 ジョーンズの神話の読解と整理

ここではセラーズ自身の議論を概観する。思考という出来事はいかなる意味で「内的」でありうるのか、観察可能な言語行為でもなく言語的心像でもないとする思考はいかなる意味で言語的でありうるのか、という問いに答えるために、セラーズは「ジョーンズの神話」を語る。

ライル人と呼ばれる人々の共同体を、セラーズは想定する。ライル人達の言語はライルの言語と呼ばれ、それは私たちの言語と遜色ないものである。ライル人たちは今見ているものの性質について語るができる。例えば、彼らは今見ているものを、「赤く少し歪な球体をしている果物、つまりリンゴである」、と記述することができる。また彼らは他人の振る舞いを記述することができる。その記述は、例えば、「彼は走っている」、「彼は昼寝している」などといったものである。しかしライルの言語には心という語彙や概念、またこれに関する語彙や概念が備わっていない。そのためライルの言語で記述できるものは標準的な仕方で経験し観察できる事柄や出来事に限られている。

セラーズは、このような状態にあるライル人たちが、通常私たちが用いる意味で思考するようになるために必要な要素をライルの言語に付加し、拡張する。彼はライルの言語に意味論的言説と理論的言説のための資源を付加する。大まかに言えば意味論的言説とは、

⁹ibid., p.172

¹⁰ibid., p.173

語の使用についての言説である。この意味論的言説によりライル人たちは互いの言語行動を性格づけるようになる。例えば、ライル人たちは自他の発話について「彼の発話内容はしかじかということの意味している」、「私が話していることはあの鳥についてだ」、「彼が言っていることは本当だった」というように。このことによりライル人たちは、他者の振る舞いや単なる物理的出来事を観察することよりも抽象的で、同じ仕方では観察できない意味についても語るができるようになる。一方理論的言説とは、なぜ起こるのかよくわからない事象を、よく知っている事象とその原因をモデルにして、説明するような言説である。例えば、ライル人のある一人が、なぜ雨が降るのかを説明しようとする。このライル人は、「あの黒い雲の上に大きな水瓶が乗っていて、その水瓶が倒れて水がこぼれることによって、雨が降る」と説明する。このライル人はよく知っている水瓶と、水瓶から水がこぼれることをモデルに、雨が降る原因を説明しようとしている。

このような拡張された言語を用いるライル人たちは、知的な行為をする際には観察可能な言語的発話をしながら行なっていた。しかしライル人の一人であるジョーンズは、仲間たちが発話を伴わないときでも知的な行為をする事実を見出し、それを説明するために次のような理論を展開する。

観察可能な発話は、単に内的出来事から始まった過程の到達点でしかない。(中略)
観察可能な言語行動は「内言 inner speech」から始まる過程の到達点である。(中略)知的な、習慣的ではない行動の真の原因は「内言」である¹¹

ここでジョーンズは行為の原因を説明するために内言を理論的に存在者として導入している。そして観察不可能な内言のモデルは観察可能な発話である。彼は行為する際に発話される内容と同じ内容の、観察できない内言が行為者のうちに生起し、それが原因となって行為がなされる、と仮定する。そして仲間のライル人たちが発話なしに行為をする際でも、もしそのライル人が通常ならば発話していただろう内容を持つ内言が行為者に生起していると、ジョーンズは仮定し、行為者に帰属する。さらにジョーンズの理論は内言に対して、発話される言葉の意味論的カテゴリーを拡張適用する。これまでライル人たちが、観察可能な発話がこれこれを意味しているとか、しかじかについてである、と語ってきたように、彼らは内言についても語るようになる。例えば、「彼が「私は今から多めに料理を作るとしよう」と言ったのは、彼に「私は今から多めに料理を作るとしよう」という内言が生じていたからだし、この内容は、育ち盛りの子供になるべく満腹に食べさせたい、ということの意味している」といったように内言について語るようになる。そして、ジョーンズはこうした「内言」を思考と呼ぶようになる。

それからジョーンズは観察可能な言語行動は思考の表現であるという理論を展開し、この理論の言葉を使って仲間達にお互いの行動を解釈することを教え、訓練する。この訓練

¹¹ ibid., p.119

は3つに区分される。ライル人たちはこの訓練を通じて最終的に他者の行為を説明するための理論の言語を自己の記述に用いるようになる。

①他者の振る舞いを観察してその行為者に思考を帰属する段階：最初ライル人たちは他者の行為を観察し、それから行為者に思考を帰属する。例えばあるライル人Aが別のライル人Bの振る舞いを観察し、「Bはpということを考えている」とBの思考を類推し帰属させる。例えば、Bが衣服をカゴに詰めて川ある方向へ行くのを見て、Aは「Bは洗濯しようと考えている」とBの思考を類推し帰属する。このような記述を用いて、ライル人たちは互いの行動を解釈する。

②自分の振る舞いを観察し思考を自己帰属する段階：次にAは自分の振る舞いを観察し、「私はpと考えている」と自身の思考を類推し自己帰属する。例えば、Aは自分がカゴに衣服を詰めて川のある方向へ行く観察して¹²、Aは「私は洗濯しようと考えている」と自分の思考を類推し帰属する。もし誰かからAが「何をしているのか」と尋ねられるなら、Aは観察をもとに「私は洗濯しようと考えている」と発話するだろう。他者の内言を類推し帰属することと同様に、Aは自分の思考についても自分の振る舞いを自分の視点から観察しつつ、自分の思考を類推し自己帰属する。

③自己観察なしに思考を自己帰属する段階：ジョーンズはこのような「自分の観察可能な行動を観察する必要なしにその理論の言葉で合理的に信頼できる自己の記述を与えるよう」¹³Aを訓練する。ジョーンズは、Aの振る舞いが「私は「p」と考えている」というA自身の言明を支持する時に肯定し、Aの振る舞いがこの言明を支持しない時に訂正を促すことによってAを訓練する。例えばAがカゴに衣服を詰めて川へ歩き「私は洗濯しようと考えている」と自己記述するならば肯定される。しかし同様の振る舞いをしていながら「私はこれで魚を取ろうと考えている」と自己記述するなら、Aは訂正を促される。

こうした訓練を経たAの自己記述は、思考（などの心的状態）に関する、自分の振る舞いの観察を必要としない直接的で非推論的な「報告」である。

以上のセラーズの議論の流れをまとめておこう。内言は他者の行為の原因を説明し解釈するために仮定されるものだった。観察可能な言語行為は思考（内言）の表現であるというジョーンズの理論のもと、ライル人たちは最初、他者の行為を観察しそれから内言を仮定し行為者に帰属させていた。次にそれと同様の仕方では観察者は自分の行為を観察し、内言を自己帰属する。最終的に、自分の行為を観察せずとも内言を仮定し自己帰属するようになる。当初は他者の行為の原因を述べる理論的言説だった内言についての語り、自分の内言を報告するという役割を獲得した。

ブランダムはこうした特権的アクセスを形成する訓練について、「以前は推論されることだけが可能であったものを非推論的に報告する条件反射（中略）を訓練によって他の人

¹² もちろん、AがBを観察するような三人称的視点からの観察ではない。A自身の視点から見た観察である。

¹³ *ibid.*, p.123

のうちに発達させることができるのである」¹⁴解釈している。これは、先の訓練を経て自分の振る舞いを観察することなく内言を仮定し帰属するという意識なく、内言を自己帰属するようになるということだと思われる。ただ、このように解釈しても、「訓練を積むことにより」という表現で、観察を必要としなくなる過程が隠されてしまう。

deVries と Triplett が提示している野鳥観察例は複雑なものについて報告するようになる標準的事例である¹⁵。野鳥観察の初心者、最初は、今見ている鳥がどういった種類の鳥であるかをそのサイズ、形、色などから鳥類辞典で調べる。観察を重ねるとともにこの野鳥観察者は見ている鳥がどんな鳥かをただただただでわかるようになる。この野鳥観察者は、形、色、サイズなどに気づくことによりその鳥を認識している。どんな鳥か気づくことは、その野鳥観察者にとっていわば透明になっており、もはや明確な気づきの対象ではない。

しかしこのような外的知覚の例は思考を報告することのモデルとして不適切である。内観メカニズムと外的知覚のメカニズムとはかけ離れて異なるために類推が成立しないからである。さらにこのモデルでは、「思考を観察する」というカルテジアン劇場のニュアンスを多分に含んでしまう。ドフリースらによると、「セラーズの主張全ては、思考についての心的言明が本質的に、振る舞い言明がそれらの真理に関する証拠を構成する、というような言明であることである」¹⁶。振る舞いの言明は言語的共同体において公的に学ばれるものである。そのため思考など心的なものの概念は、公共的要素を含んでいる。思考についての言明が真であるかどうかは、それと振る舞いや振る舞いについての言明が一致しているかどうかにより判断される。私はpと考えていると述べていながら、pと一致しない振る舞いをしているならば、その思考についての言明は証拠をもたず、訂正を促される。ただ、彼らは内言を自己帰属する際に自身の振る舞いの観察を必要としなくなる過程、理由、あるいはそのメカニズムといったことを説明していない。

本節ではセラーズが EPM において直接性の成立過程を述べているジョーンズの神話の該当箇所を概観した。彼は、心への特権的アクセスは主体が所属する言語的共同体による訓練により獲得される能力である、と主張しているとわかった。しかし先のような訓練により、具体的にどのように主体に心的出来事への特権的アクセスが生じるのか、どのようにして主体は自分の振る舞いを観察せずに思考を自己帰属するようになるのか、その過程が述べられていない。この点についてブランダムとドフリースらの解釈を挙げたが、やはり内言を自己帰属する際自分の振る舞いを観察する必要がなくなる過程を説明していない。次節では彼らとは大きく異なる解釈を示しているビショップの解釈を検討する。

2.2 ビショップの解釈①

思考と理論的実体との類推は成立しないという批判に対するビショップの解釈

ここでは EPM に向けられる批判の一つに対するビショップの議論とセラーズに対する

¹⁴ ブランダム, 2006, p.215

¹⁵ deVries, W.A. & Triplett, T., 2000, p.153

¹⁶ *ibid.*, p.156

評価をみる。彼はセラーズの議論が、特権的アクセスに関する日常的理解を説明せず、調和しないと評価する。

ビショップは‘The Analogy Theory of Thinking’（以下 ATT と省略する）においてセラーズに対する批判を3つ挙げている。

1. 私たちが特権的アクセスと呼ぶ特別な認識論的ルートにより考える人に知られるかもしれない、思考の出来事は理論的措定物のようなものではあり得ない、というのもそれがどんなに「観察できない」かもしれなくとも、理論的実体への特権的アクセスは存在しないからである、という批判。¹⁷
2. マラスによる、ジョーンズの神話は不整合である、という批判。¹⁸
3. ジョーンズ以前のライル人たちが意図的行為の概念を欠いているなら、ジョーンズの理論的刷新は振る舞いの産物として考えることに関する私たちの概念をもたらずに不十分である、という批判。¹⁹

この3つの批判のうち、心的出来事への特権的アクセスの成立問題に関わるのは一つ目だけであるため、一つ目の批判のみ検討する。1の批判は次のような構造をもつ。

- 1 理論的措定物や理論的実体は間主観的なものである。
- 2 間主観的なものへの特権的アクセスは存在しない
- 3 理論的措定物、理論的実体への特権的アクセスは存在しない
- 4 思考は理論的措定物である
- 5 思考への特権的アクセスは存在しない。
- 6 しかし、事実思考への特権的アクセスは存在する。実際に私たちは自分の思考へアクセスしている
- 7 よってセラーズの議論は間違いである。

理論的に措定される概念は間主観的に位置付けられている。セラーズは思考をそのような理論的なものとして導入している。そのような概念に対して主体は特権的アクセスを持たない。

ビショップは、EPMにおいて思考に対する特権的アクセスは、思考の自己帰属における省略と理解するための条件づけられた能力としてあてがわれる、と解釈する。この解釈はブランドムの解釈と類似している。ライル人たちは自分の振る舞いを自己観察することを省略して思考を自己帰属するようになる。この説明は特権的アクセスの説明よりもむしろ特権的アクセスを格下げする。そしてこれは特権的アクセスに関する私たちの理解を提供

¹⁷Bishop, 1980, p.227

¹⁸ ibid., p.228

¹⁹ ibid., 1980, p.232

しない。私たちは日常的に特権的アクセスが主体自身の思考に関する知識を獲得することと別の方法であると理解していると、ビショップは主張する。日常的概念では行為者が自己帰属する思考と観察者が行為者に帰属する思考とが一致しなくとも、行為者は自己帰属する思考内容を主張し維持し続けることができる。

しかしセラーズの議論上、そうすることはできない。というのも行為者が思考を自己帰属する方法と観察者が行為者に思考を帰属する方法とが、本質的に同じ推論に依拠しているからである。確かに EPM においてセラーズは、私秘性の概念が「そのうちに行動による証拠からの推論が関与しない報告という役割を持つことを認識するけれども、観察可能な行動がこれの出来事の証拠であるという事実がまさにこれらの概念の論理そのもののうちに組み込まれている」²⁰と述べている。ゆえにセラーズが認めるのは、ジョーンズ以後のライル人たちはこの推論の節約的習慣のみである。これは特権的アクセスに関する私たちの日常的な理解を説明できず、またこうした特権的アクセスがあるという日常的な理解とも調和しない。そのためビショップは EPM での特権的アクセスに関するセラーズの説明は失敗していると評価する。

ビショップの解釈をまとめる。彼は、EPM の議論では特権的アクセスに関する私たちの日常的な理解を説明できず調和しないために、セラーズの説明は失敗していると評価している。セラーズの主張は 1 の批判を退けられない。思考が理論的措定物だと仮定するとそれに対する特権的アクセスが生じないからである。セラーズの見解上、主体は他者と同じ推論を介する仕方でのみ自身の思考を知ることができる。その推論が省略されているかもしれないとはいえ、本質的には同じ方法を用いている。

次項ではより積極的なビショップによる特権的アクセスの説明を検討する。

2.3 ビショップの見解② 思考内容を「専有する」

ビショップはセラーズの議論の枠組みに添い、思考への特権的アクセスの成立過程を論じる。彼の議論において重要なのは「専有する appropriate」という考えである。

彼によると、「行為を生み出すと考えるために、思考を持つ主体が推論において思考内容を専有する必要がある」。²¹先に見たように、セラーズは思考を知的な振る舞いの真の原因だと論じていた。思考が行為を生み出すのである。観察可能な言語行動は、思考から始まる内的過程の到達点だった。ジョーンズは声に出して考えることなしに知的な振る舞いを仲間達が遂行している時でも、思考が生じていると説明していた。セラーズと同様にビショップは言語的発話の欠如においても、行為を生み出す思考が存在すると措定する。そして彼はその思考内容が、公然の発話を持たないだけで、主体に専有されていると主張する。声に出して考えることは、発話主体が専有している思考を外に向けて表現していると

²⁰セラーズ, 2006, p.124

²¹ *ibid.*, p.232. ここで述べられている「思考内容を専有する」ことについてビショップは定義を与えていない。おそらく彼は、主体が思考を他の誰のものでもなく自分のものとして所有していると考えねばならないことを、こうした表現を用いて提示していると思われる。

理解される。このことは、外へ向けられた言語的要素を通じて思考を理解するために、思考の志向性は声を出して考えることの志向性と類比的に理解される。

ビショップは特権的アクセスの存在とこれらの考えを調和させる。一方で観察者はある文脈における行為主体の振る舞いから推論を正当化することにより、言語的内容の専有を行為主体に対して帰属することを正当化する。このことはライル人たちが行為者の振る舞いを観察することで行為者の思考を帰属していたことと同等である。例えばある主体Cが、水筒とタオルとクワを持って畑に行くDを観察し、CはDに「畑仕事をする」という思考を帰属する。これらの道具は通常畑仕事で使われ、Dはそれらを持って彼の畑のある方向へ行くのだから、Dは畑仕事をすると考えている、とCは推論し、先の思考内容とその専有をDに帰属する。

他方で、行為主体は思考内容の自己帰属を観察と推論に依拠せずに正当化する。主体が推論における発話内容を専有するとき、行為主体自身が思考内容を専有することに気づいているからである。主体が持つ思考は、振る舞いに出さない限り、主体が専有するものだからである。その思考に基づいて行為するならば、その思考は他者に共有される。例えばDは水筒とタオルとクワを持って畑に向かうとき、「畑仕事をする」という思考を専有していることを知っている。またDが「畑仕事をする」と発話するならば、他者はより明確にDの思考を共有するようになる。このように主体は自分の思考の存在に関して特権的である。敷衍すれば、主体が自身の思考を専有しそれに気づいていることが、主体が思考に対してもつ特権的アクセスの内実である。

この主体が自身の思考に対して持つ特権的アクセスは、思考のモデルとなっている公的な発話がそれら自体特権的アクセスを含んでいるという事実の結果として生じる。ジョーンズの神話でもビショップの議論でも、思考のモデルは言語的発話、声に出して考えることだった。知的な行為の原因は思考だと仮定されている。そしてビショップは、そのような発話は発話者が専有する思考を外に向けて表現していると主張する。ある思考を表現する発話を、行為観察や解釈なしに、その人しかなし得ないのは、その主体が思考内容を専有するからである。

ここまでビショップの議論を扱ってきた。2.2 で見たビショップのEPM解釈上、思考への特権的アクセスは思考の自己帰属における省略、帰属する過程を節約する習慣だった。一方、2.3 で見た彼の積極的な主張においては、思考の専有が、思考に対する特権的アクセスだった。主体が思考内容を専有していることは、主体がその思考を保持していると自覚していることでもあるだろう。換言すれば、専有されている思考は専有している主体だけのものである。主体は非推論的に、自分の行為を観察することなく一直接的に一専有する思考へとアクセスする。つまりある思考を専有することはその思考への特別なアクセスを持つことである。他方、自分が専有していない他者の思考に対しては他者の振る舞いの観察や解釈、推論を介してアクセスする。

セラーズの元々の議論では、ジョーンズがライル人たちに施す「訓練により」特権的ア

クセスを、ライル人たちは獲得するという説明しかできなかった。ビショップが行ったのは主に、セラーズの議論に、主体は思考内容を専有するという考えを付け加えたことである。それにより、心的出来事への特権的アクセスの成立過程についてより深く解釈する余地が出てきた。次項ではビショップの議論を元にセラーズの議論において一人称権威が成立する筋を提示する。

3 理論的措定物としての、思考に対する一人称権威

EPMの議論において一人称権威がいかにかに生じるか、ジョーンズの神話に合わせて言えば、それまで自己解釈を経て思考を自己帰属していた主体がどのようにしてそれらなしに思考を自己帰属するようになるのか、というのが本稿の問いだった。ビショップの議論と解釈をふまえてこの問いに回答する解釈を立てる。

その解釈は、行為の原因を説明するために思考（内言）を理論的に措定するなら、その思考が帰属される主体に対して同時に、帰属される思考を専有すると仮定し帰属しなければならぬ、というものである。

観察者は思考を行為の真の原因として仮定し行為者に帰属する。行為を引き起こす原因とされる思考は、その思考が生じている当人に対してのみ働く。その思考は、それを持つ主体のみに影響を与え、少なくとも、当人に行為を開始させるような仕方では、思考は他人に対して影響を与えない。言い換えれば主体が持つ思考が行為に導くのはそれを持っている主体だけである。

EPMにおいて思考は意図的行為の真の原因として導入されていた。帰属した思考が行為の原因として機能するのは帰属された主体のみであるということ、いずれライル人たちは理解するだろう。この理解は同時に、他者から帰属される内言が原因となって行為を行うのは帰属されたこの私のみである、という理解でもある。やがて、ライル人たちは、他者から内言を帰属されていない時でも、他者が居れば思考を帰属されるような振る舞いをしていると気づく。つまり他者から思考を帰属されずとも、まるでその行為者は思考が帰属されているかのように行為しているのである。思考が行為の原因となるのはその思考を持つ主体に対してのみである。思考を他者から帰属されなくても行為者はその行為を遂行している。すなわちその行為者は、行為観察を通じて思考を帰属する他者がいなくとも、思考を有している。誰かから帰属されたのではない思考が引き起こす行為を、その思考を持つ行為者は遂行している。誰からも思考を帰属されずとも行為を遂行できるなら、その行為者は行為の原因である思考を有している。つまり行為者はその思考を専有している。

この段階に至ってライル人たちは、そもそも思考を他者に帰属する際、その専有も帰属しなければならないと気づくだろう。もし帰属する思考が行為者以外にも共有されているならば、その思考は行為者以外にも（例えば観察者にも）行為を生み出させることができるはずである。しかしそうっていない。

観察者はある人がすでに行為しているのを、あるいは行為の開始時点から、観察する。思考が行為の原因であるならば、思考は行為以前に行為者に生起している。その思考が生じた結果として行為がなされるからである。また、観察者がある人の行為の途中から観察を始めるなら、観察者は遡って行為の前にそうした行為を開始させる思考が生じていたと仮定し帰属する。もしそれが共有されるような思考であるなら（もしそのようなものであるなら）他の誰かがその行為を行っていたかもしれず、また多くの人々が現在行為している人と同様の振る舞いをしているだろう。しかしそうではなくこの行為者だけがその行為を遂行している。これはその行為者だけがその行為を引き起こす思考を有していたと解釈すべきである。そのため、観察者が行為者に思考を帰属する際、同時にその思考の専有を行為者に帰属するのである。

他方行為者自身の場合、自分が行為している最中に他者から思考を帰属されたり、自分がある行為をしつつ他者の振る舞いを観察してその人の思考を帰属したりする。行為者はやがて、先に述べたように、思考を帰属する際その専有も他者に帰属しなければならないことに気づく。そしてまたこの行為者は他者に帰属する際にそうなのだから、思考を自己帰属する際にもその専有を帰属しなければならないことに気づき、行為の原因として思考とその専有を仮定し行為中に自己帰属するなら、行為開始以前に自分はその思考を有しているという理解に至る。そしてまた、行為者は結果から原因を過程し帰属する経験を豊富に有している。例えば、ある行為をする人を観察し p という思考を行為者に帰属していた、というような個別の出来事をこの行為者は覚えている。このことはある行為をしている（結果）からそれを引き起こす思考（原因）を帰属していると言えるだろう。それを逆転させて行為者は、p という思考が自分に生じているから、これからこの行為を遂行する、と理解する。いわば、あらかじめ思考を自己帰属してから、その思考が生じさせる行為を実行するのである。例えば、9時になったら作業するという思考を8時に自己帰属し、8時台は別の作業をする。9時になったらその作業を始める、というように。あらかじめ自己帰属した思考が行為を引き起こすのはその思考を専有する当の主体だけだからである。さらにその思考と行為が整合的になるように行為者は思考を自己帰属する。あらかじめ思考を自己帰属してから行為を遂行することで、行為者は自分の振る舞いを観察することなく思考を自己帰属するようになる。こうして主体が思考に対して有する直接性が成立する。そしてまた行為者は自分の思考を任意に形成し操作することができる。そのようにできるのはその思考を形成した当の主体のみである。他者はその主体に思考を、当の主体が行うような仕方で、形成することはできないし、操作することもできない。1節で見たように、直接的に形成されるものには不可謬性と網羅性が備わっている。これらを備えていることが現実性の内実であるから、直接的に思考を形成し操作するようになった時点で、主体は現実性を有しているといえるだろう。このことにより自他の非対称性が成立するので主体は一人称権威を有するようになる。

終わりに

本稿の問いは、EPM において一人称権威はどのようにして成立するのか、言い換えれば心的状態への特権的アクセスはいかにして成立するのか、だった。これに対する筆者の回答は、主体が任意に形成し操作する思考を専有する事から、行為以前にあらかじめ思考を自己帰属するようになる。思考に対してこのような関係にあるのはそれを専有する主体のみであるという、自他の非対称性が生じる。この事から主体は思考に対する一人称権威を持つようになる、というものである。

文献

- Sellars, W. (1997), *Empiricism and Philosophy of Mind*, Harvard University Press. (EPM)
- セラーズ, W. (浜野研三訳) (2006), 『経験論と心の哲学』、岩波書店。
- Brandom, R. (1997), *Studyguide to Empiricism and the philosophy of mind.* "In Sellars (1997) (pp. 119-81).
- ブランドム, R (2006), 「読解のための手引き」, 『経験論と心の哲学』、岩波書店、pp.143-220
- Bishop, J. (1980), "The analogy theory of thinking", *Australasian Journal of Philosophy*, vol.58 No.3 pp.222-38. (ATT)
- deVries, W.A. & Triplett. T (2000), *Knowledge, Mind, and the Given Reading Wilfrid Sellars's Empiricism and the philosophy of mind, including the complete text of Sellars's Essay*, Hackett Publishing Company.
- 金杉武司 (2014), 「自己知と自己認知」、信原幸宏・太田紘史編『シリーズ新・心の哲学 I 認知篇』 pp.167-206

(かのう ようへい／千葉大学大学院人文公共学府 博士後期課程 1年)